

旅行や観光には「文化の力」「交流の力」「健康の力」「教育の力」などさまざまな効果効力がある。なかでも、その重要性を語るうえで、最も訴えていかなければならないのは「経済の力」だ。その観光の経済力に国としていち早く目を付けたのが、2003年1月に施政方針演説で観光立国宣言を行った小泉首相だ。そこで、小泉内閣で経済財政政策担当大臣などを務めた経済学者の竹中平蔵氏に、その舞台裏と観光業界発展のための課題を語っていただいた。

観光と経済

経済学者、竹中平蔵氏に聞く

――（聞き手）編集部次長・板津昌義）日本の観光立国推進は小泉内閣から始まったと言われています。そう至った当時の経緯を明かしていたくないでしょうか。

「2001年に小泉内閣ができて、最初の骨太方針を書かなくてはいけなくなったとき、当時は金融危機で銀行や財政をどうするかいろいろ頭を抱えた。その中で最後の最後まで非常に難しかったは地方の活性化。地方の企業や農業がグローバル競争に負けていて、経済が沈下していく中で、地方を強くするにはどうしたらいいのが最大の懸案事項だった。そのなかで、や

はりこれしかないと考えたのが観光産業だ」

「その当時、観光をもっとやろうといういろいろサーチしていくと、けっこう面白いことが分かった。それはホテルとかエアラインだけでなく、そこに納入している業者とかを含め、広い意味での観光で働いている人は日本の人口の

だいたい6、7%で、一方、アメリカを見ると12%、ヨーロッパは軒並み10%を超えて

いる。日本人は観光が嫌いかどうか、これは圧倒的に1位が『旅行をしたい』だから、たいへんな潜在需要がある。また、日本はその地方、地方に良さがあるから、どこにでも

文化も加えて「文化観光庁」を

きい、自動車産業が大きいと言ったって、観光にはとてもかなわない。最初のうたい文句は『世界で最大の産業は何か。それは観光産業だ』ということだった」

「これから高齢化社会を迎え、自動車の需要が落ちて、一人か二人がやりだすとわれわれも乗って来た」

「それで今日の観光振興施策があるわけですね。ただ、これはできなかったという思いが一つある。期波動の中で『コンドラチェフの波』という考え方があって、大きな技術革新は50年おきぐらいに起きる。実は観光がそれに乗っている」

「最初に世界の人たちがいろいろ町を巡るようになった

それは最初に観光の話をしたとき、観光業というとホテル業や運輸業などだけになるの

で、『これは「文化・観光産業だ」と訴えた。例えば、若い人がニューヨークに行きたいと言うけれども、それは『エンパイア・ステート・ビル』にのぼりたい人もいるかもしれないが、一番大きな需要は『メトロポリタンミュージアムに行きたい』、あるいは『ブロードウェイでミュージカルを見たい』とかで、これはみんな文化だ。そして、『おいしいオystersを食べたい』、これは食文化だ。観光産業は文化産業だから、文化と観光を一緒にしないでいい。文化と観光を一緒にした省庁を置いている国もある。実はそれをやりたかったのだが、日本は縦割りで観光が国土交通省で、文化が文部科学省というので、最初から文化・観光にはならなかった。でも将来的には『文化観光庁』を創るぐらいの意気込みが

「経済学的な観点から観光というものを見ると。これは私の仮説だが、面白い現象があって、だいたい50年周期で観光のイノベーションが起きている。経済の長い

「日本はものすごいポテンシャルを持っている。ようやく10年前から細々と動き出して、今の流れになっているのだが、それがもう一つ開花しない最大の理由の一つが、アクセスだ。日本に行きたいと

「中国でたいへん面白いと思うのは、国の機関で、三国志に出てくるこの寺はこだと認定する委員会がある。三国志の寺を募らせると『これはうちの村の寺だ』と20や30万と出る。それを全部歴史で面白いわけだ。物語を作る努力が地方にはない。大手旅行会社社に任せていてはだめだ。それは地方が自分でやらなければいけない」

「何事も文化になるわけで、ビジット・ジャパン・キャンペーンのなかで一つ出てきたのは、地吹雪を観光資源にすること。普通では体験できないことを体験してもらうわけ

「観光にはストーリーがいる。仏像を見て、仏像そのものは美しいんだけど、これはどういう権力者のもで、それに反抗しながら、誰がこんな苦勞をして彫ったのだといった物語があって初め

「いつも応援している。観光産業はまだまだ伸びる。これから団塊の世代が本格的にリタイアしてくる。観光は数少ない有望産業だ」

観光は有望産業だ

小泉内閣での地方活性の切り札



成り立つ産業が観光産業だ」

「それで『観光を大々的に取り上げたい』と経済財政諮問会議で言ったが、まったく無反応。最初の年は動かすことができなかった。それでも『これしかない』と言いつつ、福田康夫官房長官が『分かった』ということ

「これは私の仮説だが、面白い現象があって、だいたい50年周期で観光のイノベーションが起きている。経済の長い

「日本はものすごいポテンシャルを持っている。ようやく10年前から細々と動き出して、今の流れになっているのだが、それがもう一つ開花しない最大の理由の一つが、アクセスだ。日本に行きたいと

「中国でたいへん面白いと思うのは、国の機関で、三国志に出てくるこの寺はこだと認定する委員会がある。三国志の寺を募らせると『これはうちの村の寺だ』と20や30万と出る。それを全部歴史で面白いわけだ。物語を作る努力が地方にはない。大手旅行会社社に任せていてはだめだ。それは地方が自分でやらなければいけない」

「観光にはストーリーがいる。仏像を見て、仏像そのものは美しいんだけど、これはどういう権力者のもで、それに反抗しながら、誰がこんな苦勞をして彫ったのだといった物語があって初め

「いつも応援している。観光産業はまだまだ伸びる。これから団塊の世代が本格的にリタイアしてくる。観光は数少ない有望産業だ」

観光学部をたくさん創れ

――サービスを高めるために必要な取り組みは。

「最大の産業だから、それにふさわしいサービスが求められる。日本でやらなければいけないことは、観光学部をたくさん創ることだ。10年ほど前は国立大学で1校もなかった。そこで私が経済財政政策担当大臣だった頃に河村建夫・文部科学大臣に創ってほしいとお願いをした。それで創設されたのが、琉球大学と山口大学だ。観光学部は今では増えているが、文化・観光という概念がない」

「オーストラリアには3分の2の大学に観光学部がある。その名前は『ザ・デパートメント・オブ・ツーリズム・アンド・ホスピタリティ』、つまり『観光もてなし学部』だ。日本はもてなしの心がす

「観光にはストーリーがいる。仏像を見て、仏像そのものは美しいんだけど、これはどういう権力者のもで、それに反抗しながら、誰がこんな苦勞をして彫ったのだといった物語があって初め

「いつも応援している。観光産業はまだまだ伸びる。これから団塊の世代が本格的にリタイアしてくる。観光は数少ない有望産業だ」

竹中平蔵氏

慶應義塾大学教授 グローバルセキュリティ研究所所長

1951年 3月3日、和歌山県和歌山市に生まれる（現在61歳）
1973年 一橋大学経済学部卒業、日本開発銀行入行
1981年 ハーバード大学、ペンシルバニア大学 客員研究員
1982年 大蔵省財政金融研究室 主任研究官（～87年6月）
1987年 大阪大学経済学部助教授（～89年1月）
1989年 ハーバード大学客員准教授、国際経済研究所客員フェロー
1990年 慶應義塾大学総合政策学部助教授
1996年 同教授
1998年 「経済戦略会議」（小渕首相諮問会議）メンバー
2000年 「IT戦略会議」（森首相諮問機関）メンバー
2001年 「IT戦略本部」メンバー、経済財政政策担当大臣
2002年 金融担当大臣・経済財政政策担当大臣
2004年 参議院議員当選、経済財政政策・郵政民営化担当大臣
2005年 総務大臣・郵政民営化担当大臣
2006年 慶應義塾大学教授 グローバルセキュリティ研究所所長（現職）、日本経済研究センター特別顧問（現職）、アカデミーヒルズ理事長（現職）
2007年 パソナ特別顧問・アドバイザリーボード（現職）
（竹中平蔵公式ウェブサイトから抜粋）

物語があつてこそ旅は面白い

ズロックとかゴールドコーストとかいいところいろいろある。ところが観光学部の教授がアンケート調査を取ってみると決定的に悪いところがあった。それは飯がまずいこと。それで、オーストラリア政府は、各国のシェフを招き入れるときのピザを緩くした。そうすると世界中からシ

「一番の問題は、さっき言ったように言葉の問題だが、もう一つは、ルート開発がすごく重要だ。観光は一種の知

「観光にはストーリーがいる。仏像を見て、仏像そのものは美しいんだけど、これはどういう権力者のもで、それに反抗しながら、誰がこんな苦勞をして彫ったのだといった物語があって初め

「いつも応援している。観光産業はまだまだ伸びる。これから団塊の世代が本格的にリタイアしてくる。観光は数少ない有望産業だ」

「観光にはストーリーがいる。仏像を見て、仏像そのものは美しいんだけど、これはどういう権力者のもで、それに反抗しながら、誰がこんな苦勞をして彫ったのだといった物語があって初め

「いつも応援している。観光産業はまだまだ伸びる。これから団塊の世代が本格的にリタイアしてくる。観光は数少ない有望産業だ」